

日本語の特徴

文理解の方略の言語間の比較から

伊藤武彦

1 言語普遍性と語訓の問題

世界の言語を比較するためには様々な方法がある。ここでは諸言語を語順によっていくつかのタイプ(類型)に分類した研究を紹介する。この様な研究を本格的に行ったのは Greenberg (1963) が最初である。彼は、文の主要な構成素として主語(S)と目的語(O)と動詞(V)の三つ¹⁾が各言語で基本的にどの様な語順に配列されているかを調べた。順列の可能性から SOV・SOV・VSO・VOS・OVS・OSVの六つの語順が考えられる。Greenberg (1963) とそれ以降の諸研究の結果をまとめてあるのが表1である。表にあるように、SOVとSOVの語順が圧倒的に多く、VSOがその次に多

く、OがSの前に来るVOS・OVS・OSVを基本語順とする言語はごくわずかな数しかなかった。Greenberg (1963) は「名詞の主語と目的語を持つ平叙文において支配的な語順は、ほとんどいつも主語△S▽が目的語△OVに先行すること」を類型論による言語普遍性の一つとしている。このことはそれ以降の諸研究でも裏付けられているといえる。

ところで表1をみると Greenberg (1963) より後の五つの研究ではSOV語順のほうがSOV語順よりも言語数がやや多い。SOV言語である日本語は語順による類型論という観点でみる限り特異ではなく、ありふれた言語であると言える。動詞が文末にくるといふ日本語の構造的特徴を日本人の日本語による表現のあいまいさと結

1987
222

びつける主張は、柴谷 (1981) の指摘するように、語順による類型論の観点からは否定されざるを得ない。この主張からは世界の約4割もの言語による表現があいまい性を持つということになってしまう。

さて、実際の言語行動においても、SがOに先行するという言語構造の普遍性に対応するような特性が使用言語の違いを越えて普遍的に見いだされるものであろうか。これを明らかにすることが本節のテーマである。この疑問に対しては、格変化語尾や格助詞などの格標識 *case marker* を文中から外した無標文²⁾に対する文理解の研究が一つの答を与えてくれよう。これらの研究は、具体的動作をあらわす動詞を用いて、文中の二つの名詞のどちらが動作主 *agent* すなわち動作の主体となり、もう一方が被動作主 *patient* すなわち動作の客体となると解釈するかを幼児期から調べたものである。無標文の理解では、名詞の意味の手がかりが中立的な文 (例えば「犬が猿を追いかけた」のようにSとOとを入れ換えても文が成立する文。一般に可逆文と呼ばれる。以下無標文の中立的な名詞をNで示す) においては、ある時期 (4-5歳頃) に第一名詞を第二名詞よりも動作主すなわち主格とみなす傾向が、フランス語 (Sinclair & Bronckart, 1972; Sinclair, 1973) 英語 (Fager-Plusberg, 1978 (Hakuta, 1979 (14-20); Bates et al, 1981)、イタリア語 (Bates et al, 1981; Slobin & Bever, 1982)、ヘブライ語

(Frankel et al, 1980) 等のSVO言語にあらわれた。なお、いずれもNVN⇌動作主⇌動作⇌被動作主とする傾向が、VNN⇌動作⇌動作主⇌被動作主およびNNV⇌動作主⇌被動作主⇌動作とする傾向よりも顕著であった。屈折や冠詞による格標識が名詞の性によって中立的になるヘブライ語 (Frankel et al, 1980) やセルボ・クロアチア語 (Slobin & Bever, 1982) やドイツ語 (Mills, 1979 (Slobin & Bever, 1982 による)) においても中立的な名詞2個と動詞によるNVN型の文は動作主⇌動作⇌被動作主と解釈された。

日本語においても、無標の可逆文に対して文頭の名詞を動作主として文理解する傾向があることが確認されている (Hayashibe, 1975; Hakuta, 1979; 伊藤・田原, 1987)。このように、助詞などの格標識がない場合に文理解の手掛りとして、第一名詞⇌動作主とする現象は日本語児にも日本語児以外にも存在する。

文の理解のために用いられる様々な手掛りの利用の仕方について、知覚の方略 *perceptual strategy* を提起した Bever (1970) は、英文理解の過程をいくつかの比較的単純な定式化によって整理し、一方でそれを知覚過程の一般的原理と結びつけて考察すると同時に、他方でそれらの定式すなわち、知覚の方略と英語における統語的構造との関連について論じている。英語の構造の中でも彼は語順を特に重視している。いくつかの方略の中で、

とりわけ単文理解の獲得過程において興味深いのは、彼が「順次的ラベリング方略」または「方略D」と呼ぶ、語順を手がかりにして単文中の格関係を決定する方略である。本方略では「表層構造における潜在的単位の単位の中にある、どのような名詞―動詞―名詞(NVN)の語順でも『行為主―行為―対象』と解釈する。この方略の存在は、子どもがある年齢段階において受動文を理解する際に、最初の名詞(すなわち主語)を「行為主」と誤解し、動詞の後の名詞(すなわち行為主)をあたかも能動文のように行為の対象であると解釈してしまう事実(Bever, 1970; Maratsos, 1974; Bridges, 1980)によって

何度も確かめられている。この方略は第一名詞||動作主agentとみなす方略であり、以下「第一名詞方略」と呼ぶことにする。子どもは、受動変形によって表層上に現れた標識(Be動詞、*eat, by*などの前置詞)に気づかず、また気づいたとしても、動詞の前の第一番目の名詞が動作の主体を示すのだということの方が判断の基準になったため、正しく文処理できなかったのである。受動文におけるこのような第一名詞方略は、英語児のみならずフランス語児によっても確かめられている(Sinclair & Bronckart, 1972)。日本語においては、文頭の名詞に「が」がついていると、受動文においても「行為者」と誤って判断する時期があることを、Sano (1976) や Hakuta (1977, 1979) が確かめている。

以上のように、語順の要因が、子どもの文理解において重要な手がかりとなるのであるが、英語などのように統語論上語順が主な役割を占める言語と、日本語のように語順よりも助詞が文中の格関係を主に決定する言語との間では、その重要性が異なってくる。そこで、各国の子どもの文理解の発達を、使用する方略の変化ということに焦点を合わせて展望してみよう。

2 ― 能動文、受動文理解における方略の変化

この節では、能動文、受動文の処理における子どもの方略を研究が蓄積されている日英両言語についてみよう。受動文では、被動作主が主格あるいは主語の名詞句となる。その名詞句は文頭すなわち第一名詞となる場合が圧倒的に多い。従って、受動文は動作主を選択する場合、語順の手掛りによる第一名詞方略と文法的手掛りに基づく方略(統語方略)が対立・競合する文型であると言える。

[1] 英語児

Bever (1970) は、SVOから成る能動文を、SとOの関係によって(1)のような3種類の文型を作って、まず能動文で、2歳から5歳までの男女児の文理解を調べた。

- (1) a. The cow kisses the horse.

(可逆文 reversible sentence)

- b. The mother pats the dog.

表1 世界の言語における基本語順の分布

文 献	調査言語数	SOV	SOV	VSO	VOS	OVS	OSV
Greenberg (1963)	30	37.0%	43.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%
Ultan (1969)	75	44.0%	34.6%	18.6%	2.6%	0.0%	0.0%
Steele (1978)	63	47.8%	31.7%	15.9%	4.7%	0.0%	0.0%
Ruhlen (1975)	427	51.5%	35.6%	10.5%	2.1%	0.0%	0.2%
Malinson & Blake (1981)	100	41.0%	35.0%	9.0%	2.0%	1.0%	1.0%*
Tomlin (1986)	402	44.8%	41.8%	9.2%	3.0%	1.2%	0.0%

*Unclassified = 11.0%

(適合文 probable sentence)

c. The dog pats the mother.

(不適合文 improbable sentence)

≡ nonreversible sentence)

2歳児から3歳児にかけては不適合文の理解の成績が低い。4〜5歳では正しく理解する割合が高くなっている。2〜3歳児ではNVN \parallel SVOと解釈する語順による方略よりも、動作主になりやすい属性を持つ名詞を主語とみなす意味方略が優位であり、語順による文処理は

4〜5歳の時期で意味方略よりも強力になる。そこで可逆文の能動文と受動文について同じ実験を行なうと、2歳前半では能動・受動の成績は変わらないが、2歳後半〜3歳児では受動文の正答率が大きく低下した。これは第一名詞を行為主として選択したためであろう。4歳後半から5歳になると能動態・受動態のどちらでも正答率は高くなる。NVN \parallel SVOという単純な、第一名詞方略から抜け出して、態の標識と文の変形に気付き、大人と同じ方略を使用するのである。

Maratsos (1974)もまた、3〜12歳児に受動態の可逆文を標示させることにより、第一名詞方略の存在を確かめた。

Stobin (1966)は、6〜12歳の子どもと大人に、絵を見せて、それに対する真または偽の内容の描写を能動文、受動文、否定文と受動否定文とで与え、真偽を判断させ、

反応潜時を比較した。その結果、子どもも大人も、可逆文の場合には受動文の理解は時間がかかったが、非可逆文(適合文と不適合文)の場合にはこの違いがなくなつた。したがって意味的な手がかりによる文理解の方略は、能動・受動の態の違いという統語的な方略が獲得された後にも、ひき続いて文処理の有効な手段として働いていることが示された。

以上の英語児の能動・受動文理解に関する諸研究は、方略の使用の変化という視点から、次のようにまとめることができよう。

まず意味整合文では、正しい動作主の選択をするが、不整合文では意味的に動作主になりやすい目的語を動作主として選択して語順を無視してしまうという意味方略優位の時期がある(幼児期前期)。第一名詞方略も存在するけれど、語彙の意味の方が、語の位置よりも判断の主な手がかりとなるのである。次に、NVN \parallel SVOと解釈して語順を手がかりとする第一名詞方略が意味方略をおさえて優位になる時期が訪れる(幼児期後期)。子どもは語彙の意味の手がかりがない可逆文においてのみならず、意味的手がかりがかえって第一名詞の選択を防げる働きを持つ不整合文においても第一名詞を動作主として選ぶのである。しかし、受動文においては第一名詞は主語であるが、意味的には動作の対象として解釈されるべきことを理解していないので正答率が激減する。次

の段階の子どもは態の変形に気付くようになる。もしも動詞句が「規準型」すなわち能動態ならば第一名詞は動作主であるが、もしも動詞句が「規準型」でない場合(例えば受動態の場合)には語順による判断ができなくなってしまう。受動文の正答率は前段階より回復してチャンス・レベルに近づくのである。第一名詞方略という誤った方針は廃棄されたが、受動変形の文法的理解が達成されていない段階である。最後に受動文を統語的に正しく理解する時期に到達する。大人と同じような統語的判断が可能なることから、この時期は統語方略が優位な段階と位置づけられよう。

〔2〕日本語児の場合

英語の場合には、文中の格関係は、主に語順によって標示されるのに対して、日本語は助詞という後置詞を持ち、とりわけ格助詞が格の決定に重要な役割を果たす。日本語の能動文と受動文の理解を研究したものととして Sano (1977), Hakuta (1977, 1979), 八木 (1980), 鈴木 (1977) の研究がある。Sano は、3歳半から6歳半の子どもを対象に文理解の実験を行い、能動文においてSOVの語順「―が―を―した」の方がOSVの語順「―を―が―した」よりも正しく理解されやすいことを示した。鈴木は文理解に関する実験の結果は、受動文理解が能動文理解より遅れ、第一名詞方略(鈴木は「語順方略」と呼んでいる)の存在を明らかにしたものとなっている。

Hakuta (1979) の結果もこれらの結果を支持している。Hakuta は可逆的な能動文の理解を2歳〜6歳日本語児に対して演示法(文の内容を人形などの動作で被験者に再現させる方法)で実験したところ、SOV能動文はOSV能動文よりも理解されやすく、また能動文理解が受動文理解よりも容易であるとの結果を得た。能動文理解は3歳以前に習得されるが、受動文の正しい理解は5歳以降である。興味深いのは、4歳頃の子どもが、SOV受動文(「―が―に―された」)を第一名詞||動作主とした誤りが高率であったことである。このような結果はなぜ生じたのであろうか。それを明らかにするために、日本語児の文理解の方略の発達の変化を英語児のそれと比較してみよう。OSV能動文が年少の子どもにとってむずかしい課題であり、答えがチャンス・レベルにあった、すなわち正答と誤答の数がほぼ等しかったことは、Beverの第一名詞方略が英語に適用できて日本語に単純には適用できないことを示している。なぜならば、Beverの第一名詞方略に従うならば助詞が付いていても第一名詞を動作主として選択し、すべてが正答となってしまうだろうからである。それと同時に、助詞のみならず語順の要因も初期の日本語理解にとって重要であることを示す。日本語児にとって理解が容易なSOV能動文すなわち、「―が―を―する」という文は、日本語の規準的形式である。したがって、規準的文型が子どもに最

もよく理解されやすいということは、日英両言語とも共通した特徴である。そしてアメリカの子どもに、受動文を規準的文型と同じ手がかりで文処理をする——第一名詞方略を適用する——段階があるのと同じように、日本の子どもには、

第一名詞十ガ動作主

という方略によって文処理をする段階があると Hakuta は主張する。それは、最初の名詞句が「名詞十ガ」であり文の主格である SOV 受動文（「ーガーにーされた」）の正答率が著しく低かったグループがあったからである。

日英両言語の文理解の発達過程の比較で確かめられたことは、規準型以外の文型を規準型を解釈する方法によって誤って解釈してしまう時期があるということである。この時期を経てから能動態と受動態との違いを正しく理解する時期が訪れるのである。

ところで、すべての文をこの規準型とみなして解釈するステレオタイプの方略と、第一名詞方略や助詞を手がかりとした方略との間には、獲得の順序性や言語構造の違いによる方略使用の違いがあることがわかっている。そのことをより一層明らかにするために、次節では、様々な言語で文理解のための複数の手掛りを対立・競合させ

た実験計画を用いた、文処理の発達に関するに諸研究を展望してみよう。

3——文理解の方略の発達に関する交差言語的研究

Bates et al.(1980)でイタリア語と英語を母国語とする成人を対象として、NVN、VNN、NNVの3水準の語順の要因と有生 animate—有生(AA)・有生—無生 inanimate(AI)・無生—有生(IA)の3水準の名詞の意味の要因、第一名詞強勢(ストレス)・第二名詞強勢・両方強勢無の3水準の強勢の要因、旧情報—新情報、新情報—旧情報、新情報—新情報の3水準の提題の要因からなる単文刺激の提示後、主語(または目的語)はどちらかを答えさせた。その結果、イタリア人は、主に名詞の意味を手掛りにして有生名詞を主語に選ぶが、NVN語順では、その傾向が少し弱まり、第一名詞を主語とする傾向があった。一方アメリカ人は、意味の要因を少ししか用いず、主語(または目的語)選択の基準となったのは語順の要因であった。彼らの反応は単純な第一名詞方略ではなく、以下のような統語的な語順の手掛りによるものであった。

NVN || SVO

e.g. The dog kisses the cat.

(The dog が主語)

NNV || OSV

e.g. The dog the cat kisses.

(The cat kisses the dog. と解釈)

VNN=VOS

e.g. Kisses the dog the cat.

(The cat kisses the dog. と解釈)

VNNの場合には第一名詞=主語だが、NNVとVNNの場合には第二名詞が主語と判断されたのである。このような方略を「統語方略」と呼ぶことにする。この方略は、VNをVOとみなしNVをSVとみなすという、英語の統語論にかなった方略⁽³⁾であるからである。英語の動作主と被動作主を含む能動肯定平叙文ではSVO唯一の語順しか認められないが、イタリア語では3つの語順(NVN、VNN、NNV)が可能であり、格の決定は強勢(ストレス)などの非統語的の手掛りによって決まる。すなわち英語においては語順の制約は強制的であるが、イタリア語は語順が自由である。また英語においては語順が唯一の統語的の手掛りになっているのにひきかえ、イタリア語では語順が統語上果たす役割は小さい。

さて、語順と意味と強勢の三要因に絞って二歳半〜五歳半の子どもの対象とした実験の結果を見てみよう(Bates et al.1981)。英語児の反応は意味の要因よりも語順の要因に影響を受けた。この傾向が著しいのはNVN=SSVOとする場合であり、VNNやNNVの場合には、チャンスレベルに近い反応が多く、大人のように第

二名詞を動作主とする傾向はなかった。一方、イタリア語児は主に名詞の意味による意味方略を適用し、有生名詞を動作主とする傾向にあり、語順の三水準間の差は小さい。しかし五歳半〜五歳半の時期に、全語順にわたって第一名詞方略が出現した。

「語順方略」という用語を本論文で用いず、「第一名詞方略」を使ってきたのは、このBates et al. (1981)の研究におけるアメリカ人の幼児とアメリカ人成人の文処理の方略の差を明示したかったためである。すなわち、大人の「語順方略」は英語の「統語方略」であるのに、英語児の「語順方略」は文頭の第一名詞を動作主と解釈する方略であり、イタリア語児にも共通に見られるのである。

さて、イタリア語児の第一名詞方略と英語児のそれとは、語順の要因によって出現の仕方が異なる。英語児がNVNの文型にのみ、この方略を適用しているのに対し、イタリア語児は三文型すべてに適用している。英語児は規準的語順と非規準的語順を弁別し、前者のみ第一名詞方略を適用しているのである。

以上、見てきた限りでは、第一名詞方略は、適用の仕方が語順によって選択的かどうかの違いがあるにせよ、諸言語を獲得する途上に必ず出現していた。しかし、第一名詞方略が出現しない言語がある。それはトルコ語である。Stobin & Bever (1982) および Stobin (1982)によ

れば、トルコ語児の格関係の理解は他言語児よりも早期に達成され（2歳以前）、SO型（SOV、SVO、VSO、VO）とOSS型（OSV、OVS、VOS）との正答率にはほとんど差がない。トルコ語では、直接目的語の標示が接尾辞によって行なわれる。目的格接尾辞は目的語に強制的・規則的に付加され、格標示が明確なため、SVO、OVS、SOV、OSV、VSO、VOSのいずれも文法的であるという、語順に全く統語的・手掛りのない言語なのである。

トルコ語と英語は、格標示が強制的で規則的であるという共通点を持つのに、前者の獲得が後者よりも早期に達成されるのは、接尾辞対語順という格標識のシステムの違いであろう。接尾辞は、それ自身単一で名詞（語幹）の格を示す、単独の手掛り（局地的手掛り local cue）であるのに対し、語順は、単語と単語の位置（実際の話しコトバにおいては、時間的順序）の関係から判断する関係の手掛りであり、聞き手に、より多くの処理の手続を必要とさせるのであろう。

日本語の助詞も「単独の手掛り」であるのに、なぜトルコ語の文理解よりも獲得の時期が遅く、語順を非規準型にするという理解上の困難をひきおこすのであろうか。

Slobin & Bever (1982) は、その理由として、(1) 目的語の格助詞は話しコトバでは省略可能 optional であり、(2) 目的語が文頭に来る場合は、目的格助詞ヲが主題助詞

ハに代替されることがある——すなわち、トルコ語のように規則的、強制的な単独の手掛りでないことを挙げている。

4 成人における文理解の方略の交差言語学的比較

子どもではなく成人の場合には、文理解に用いる方略は、まずその言語の文法構造から導き出される格標示システム（日本語・韓国語の助詞、英語・中国語の語順、ドイツ語・オランダ語の名詞・代名詞の格変化、イタリヤ語の動詞語尾変化、等々）に基づくということが予測される。表2にまとめられている様に、この予測は妥当であることが、様々な言語で示されている。

伊藤の一連の研究はハとガが動作主選択の手掛りを果たす役割の強さを明らかにし、また、日本人成人は意味方略を多用しアメリカ人成人は語順に依存する傾向が第一言語のみならず第二言語においても存在することを示した。伊藤・田原(1989)も日本人成人のこの傾向を支持している。伊藤・田原(1987)は助詞ヲについても文理解の強い手掛りとなることを示した。

田原・朴・伊藤(1987)は、韓国語における主題助詞（日本語のハに相当する）と主格助詞（日本語のガと対応する）の入った単文の理解の方略を発達的に調べた。

全体的にいえば韓国語においては格標識に基づく助詞方略が最も強く、次に強いのが語順方略であり、名詞が生

表2 各言語における成人の文処理の手掛りの強さの順序

文 献	言語	文処理の手掛りの強さの順序
伊藤1982b, 1983	日本語	助詞ハ・ガ>animacy>語順
伊藤1982a	英語	語順>animacy
伊藤・田原1986	日本語	助詞ハ・ガ>animacy>語順
田原・朴・伊藤1987	韓国語	助詞eun/neun・i/ga>語順>animacy
伊藤・田原1987	日本語	助詞ヲ>animacy>語順
MacWhinney et al. 1984	英語	語順>animacy>単複の一致
	イタリア語	単複の一致>animacy>語順
	ドイツ語	(名詞格変化>)animacy>単複の一致>語順
McDonald 1986	英語	語順>animacy>代名詞変化
	オランダ語	代名詞格変化>語順>animacy

物が無生物かといった名詞の意味による意味方略は最も弱かった。伊藤・田原(1986,1987)によれば、日本語においては格標識による助詞方略が最も強く、意味方略がこれに続き、語順方略が最も弱かった。日・韓両言語において、助詞方略が格関係の決定に最も強い役割を果たすのは、両言語の語順が比較的自由であり、格助詞が比較的自由であり、格助詞が格関係の決定に主要な役割を占めているという文法規則性によるものであろう。この意味では両言語の話者の単文処理の様式は非常に似ているといえる。助詞という文法的手がかりが得られない場合、韓国語では、意味の要因よりも語順に頼るのに対して、日本語では語順よりも意味に頼るといふ違いがみられたのである。

MacWhinney et al.(1984)は、英、イタリア、ドイツ語において、各々の成人母語話者が、語順(NNV,NVN,VNN)、意味(AA,ALIA)、格標識(名詞と動詞との3人称単数対3人称複数数の接尾辞の一致。ただし、ドイツ語においては女性名詞を使用)の3つの手がかりを単文理解においてどのように使用するかを比較した。英語においては、語順方略が圧倒的に強く、意味方略は極めて弱く、格標識に基づく単文処理もほとんど見られなかった。イタリア語では、むしろ、格標識が極めて強く、意味方略がこれに続き、語順方略は極めて少なかった。ドイツ語話者は意味方略が一番強く、格標識が

これにつき、語順方略はほとんど全く見られなかった。MacWhinney et al.(1985)は、ハンガリー語で同様の実験を發達的に行つた。成人ハンガリー語話者は、格標識(目的格の接尾辞、—*c*)が圧倒的に強く、語順の手がかりは極めて弱く、意味方略はほとんど全く用いられなかった。

McDonald(1986)は、英語とオランダ語の単文処理について同様の実験を行い、格標識・語順・意味の手がかりのうち、いずれの手がかりが動作主の決定に強い影響力を及ぼすかを發達的に検討した。彼女の得た結果は、英語においてはやはり語順方略が圧倒的に強く、意味方略は極めて少なく、格標識(代名詞の主格または対格、例えば *he* と *him*)に基づく単文処理はほとんど全くみられず、MacWhinney et al.(1984)と共通する結果が得られた。これに対して、オランダ語においては格標識(代名詞の主格または対格 *zij* と *hem*)。これらは英語の *he* と *him* に対応)による方略が最も強く、語順がこれに続き、意味方略が最も弱かった。このオランダ語の格関係の決定における方略の順序は、韓国語のそれと同じである。しかしながら、McDonald(1986)の成人のデータを田原・朴・伊藤(1987)の実験の成人のデータと比較すると、韓国語母語話者の方が、格標識に基づく方略により依存し、意味方略については韓国語話者よりもオランダ語話者の方が意味方略への依存が大きく、語順方略

の使用については韓国語の方がオランダ語に比べて低かった。以上の差異は韓国語の単文処理において助詞の果たす役割が極めて大きいことを示すものである。

日本語の助詞ハとガとヲ、およびハンガリー語の目的格接尾辞は、韓国語の助詞と同様に、格関係の理解において強力な手がかりとなっている。これら三言語の格標識に共通するのは、主格や主題、または目的格という単一の形式と意味が対応関係にあり、意味関係と機能的な形能素の形式が明確であるということである。また、これら三言語は膠着語的性格が強く、性や数に左右されない「単一の手がかり」(local cue; Slobin and Bever, 1982)である。一方、英、ドイツ、オランダ、イタリア語では、上記の実験において、韓、日、ハンガリー語と比べて、相対的に格関係の果たす役割は弱かった。これら四言語では、主格と目的格の格標識の形式が性、数の条件によつては同形となるのが普通であるので、実際の言語行動における動詞に対する名詞の一致 agreement の手がかりとしての強さは、さらに弱まると考えられる。

5 ———— まとめにかえて

本論文では文理解の方略という観点から日本語の特徴を他言語との比較により考察した。日本語は、決して特異な言語とはいえない。また、韓国語との類似性も指摘された。しかし、もう一方では、意味方略の使用が多い

ことなど、日本語の言語構造の特徴を反映していると思われる事実も明らかにされてきている。文理解の過程を人間の認知過程の一例と捉えたと、言語の特徴が人間の思考や行動に影響を与えるという「弱いサビア＝ウォーフ仮説」を支持していると解釈することも可能であろう。Slobin(1986)はこのような言語構造の違いを視野にいれつつ言語発達における普遍的な原理(＝操作原理 operating principles)を主に自然観察的データによって明らかにしようとしている。本研究の今後の方向は日本語の個別性を普遍性をふまえた上で実験的に明らかにしていくことである。

註(1) これら主語・目的語・動詞という文法的カテゴリーが全ての言語に普遍的に適用できるかどうかは議論の分かれるところであろう。例えば三上(1960,1975など)は主語のカテゴリーを日本語にあてはめるのは不適切であるとし、日本語の主語廃止論を唱えた。主語の概念が多様な属性を持つことが指摘されたり(Li and Thompson, 1976)「主語はプロトタイプ的な概念であって主語と主語でないものとの境界をはっきりさせることはできない(Comrie, 1981)」との主張もある。

註(2) 本論文では有標文に対する文理解の方略と無標文に対しての方略の両方の方略について言及しているわけだが、以下、特に断わらない場合は有標文についての研究である。

註(3) 英語児が著しく語順の手掛りに依存する原因は、英語という自然言語の構造的特殊性に帰することができると思う。英語の特殊

性とは、第一に語順が統語論(構文)において決定的ともいえる役割を果たすことである。英語の語順について検討をしている Bever(1970)は、いくつかの興味ある文例を提出している。たとえば、

(a) Her and him liked the cannabis juice. (p.321)

という文は受容可能な acceptable な文であるが Bever は言う。ある英語の native speaker によれば、ある階層の人々にとっては(a)のように代名詞が目的格の形で文頭に置かれて、主語として使用することがあると言う。この例は、代名詞の格変化よりも、語順の方がより統語的に重要な手掛りになることを示している。また、複文において、例えば、

(b) The boy she saw pleased the girl he kissed.

は、完全に受容可能な文であり、関係代名詞の省略はむしろ普通のことである。NNV = OSV と自動的に判断できる彼らにとって関係代名詞の whom that which 等は冗長に感じられるのであろう。これらの関係代名詞は書きことばにおいても省略可能である。

英語の第二の特殊性は、無生名詞が主語にはりやすいということである。英語の規準的文には、たとえば、(c)のように、道具格(instrumental)にあたる名詞句が主語になっても文法的である。英語では(c)と(d)はともに受容可能 acceptable である。

(c) He killed the policeman by the knife.
(d) His knife killed the policeman.

しかし日本語では(e)は受容可能だが(f)は受容不可能な文である。

(e) 彼が警官をナイフで殺した。
(f) 彼のナイフが警官を殺した。

註(4) 格標識としての助詞の機能の強さは、ヲ/Vガ/Vハの順であった。この順番は省略の頻度の少なさと対応していると思われる。すなわち、主題助詞ハは三つのうちで一番省略されやすい。ガとヲの助詞だけの省略率の高低は不明だが、ガ名詞句はヲ名詞句よりも他動詞文における省略率が高いのは間違いないことだと思われる。な

お主題動詞へと格助詞方との違いについては、伊藤(1986)を参照せよ。

註(5) 日本語の主題助詞および韓国語の主題助詞 *em/neur* は、格助詞でなく格関係を標示する機能を文法上もたない。しかし伊藤(1982)と田原・朴・伊藤(1987)によれば、言語理解という言語使用場面において主題助詞の付く名詞句は動作主として判断される傾向が強かった。

註(6) 「サビ・ア・ウォーフ仮説」には二種類ある。言語の構造や特徴が人間の思考・認知・行動を決定するという考えを「強いサビ・ア・ウォーフ仮説」とよび、「決定する」のではなく「影響を与える」という両者の関連性を認める考え方を「弱いサビ・ア・ウォーフ仮説」とよぶ。

参考文献

Bates, E. and MacWhinney, B. 1979 A functionalist approach to the acquisition of grammar. In Ochs, B. and Schieffelin, B. (Eds.), Developmental pragmatics. Academic Press, Pp.167-211.

Bate, E., MacWhinney, B., Caselli, C., Devescovi, A., Natale, F., and Venza, V. 1984 A cross-linguistic study of the development of sentence interpretation strategies. Child Development, 55, 341-354.

Bates, E. and MacWhinney, B. 1986. Competition, variation, and language learning. In B. MacWhinney (Ed.), Mechanisms of language acquisition. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum, in press.

Bever, T. G. 1970 The cognitive basis for linguistic structures. In Hayes, J. R. (Ed.) Cognition and the development of language. Pp. 272-362.

Chafe, W. L. 1970 Meaning and the structure of language. University of Chicago Press.

Chafe, W. L. 1976 Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of views. In C. N. Li (Ed.) Subject and topic. Academic Press, 25-56.

Comrie, B. 1981 Language universals and linguistic typology. Oxford: Basil Brackwell.

Greenberg, J. H. 1963 Some universals of grammar with particular reference of the order of meaningful elements. In J. H. Greenberg (Ed.) Universals of grammar, 73-113. MIT Press.

伊藤武彦 1982a 英文理解の方略：アメリカ人、日本人留学生、日本人学生の比較。日本心理学会第47回大会発表論文集, 190.

伊藤武彦 1982b 日本語の「は」と「が」の動作主性：日本人、二言語併用者、アメリカ人日本語教師／学習者の比較。日本教育心理学会第24回総会発表論文集, 24-25.

伊藤武彦 1983 日本語助詞なし文理解の方略：日本人、二言語併用者、アメリカ人日本語教師／学習者の比較。日本教育心理学会第25回総会発表論文集, 319.

伊藤武彦 1986 日本語の助詞へとガの多重機能性。和光大学人文学部紀要, 21, 95-105.

Ito, T. and Tahara, S. 1985 A psycholinguistic approach to the acquisition of multifunctionality in Japanese particles *wa* and *ga*. Descriptive and Applied Linguistics, 18, 121-131.

伊藤武彦・田原俊司 1986 へとガの動作主性の発達。ハン・F. C.・

八代京子・秋山高二(編) こたはの多様性 87-106文化評論出版。

伊藤武彦・田原俊司 1987 被動作主をあらわす助詞の獲得。日本教育心理学会第29回総会発表論文集(準備中)。

若立志津夫 1980 日本語における語順・格ストラテジーについて。心理学研究 51, 233-240。

Keenan, E. L. 1976 Toward a universal definition of "subject". In C. N. Li (Ed.) Subject and topic. Academic Press.

Kilborn, K. and Coorman, A. 1986 Sentence interpretation strategies in adult Dutch-English bilinguals. Unpublished paper.

Li, C. N. and Thompson, S. A. 1976 Subject and topic: a new typology of language. In C. N. Li (Ed.) Subject and topic. Academic Press.

MacWhinney, B., Pleh, C., and Bates, E. 1985 The development of sentence interpretation in Hungarian. Cognitive Psychology, 17, 178-209.

MacWhinney, B., Bates, E., and Kilgell, R. 1984 Cue validity and sentence interpretation in English, German, and Italian. Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior, 23, 127-150.

Miao, X. 1981 Word order and semantic strategies in Chinese sentence comprehension. International Journal of Psycholinguistics, 8-3, 123, 109-122.

Miao, X., Chen, G., and Ying, H. 1984 Re-examination of the role of word order and word meaning in sentence comprehension. Paper presented at the Conference of Shanghai Psychological Association.

(in Chinese)

三上章 1955 現代語法新説。刀江書院(くろしお出版)。

三上章 1960 象は鼻が長い。くろしお出版。

三上章 1975 主格・主題・主語。三上章論文集, 51-61, くろしお出版。

柴谷方良 1981 日本語は特異な言語か? : 類型論から見た日本語。月刊「言語」, 10 (12), 46-53。

Sinclair-de Zwart, H. 1973 Language acquisition and cognitive development. In T. E. Moore (Ed.), Cognitive development and the acquisition of language. New York: Academic Press. 9-25.

Sinclair, H. and Bronkard, J. P. 1972 S. V. O. a linguistic universal? a study in developmental psycholinguistics. Journal of Experimental Child Psychology, 14, 329-348.

Slobin, D. 1982 Universal and particular in the acquisition of language. In L. R. Gleitman & E. Wanner (Eds.), Language acquisition: state of the art. Cambridge: Cambridge University press.

Slobin, D. (Ed.) 1985 The cross-linguistic studies of language acquisition. Vol. I, II. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Slobin, D. and Bever, T. 1982 A Cross-linguistic study of sentence comprehension. Cognition, 12, 229-265.

Tomlin, R. S. 1986 Basic word order: functional principles. London: Croom Helm.

鈴木清一 1977 日本の幼児における語順方略。教育心理学研究 25, 200-206。

田原俊司・朴 媛淑・伊藤武彦 1987 韓国語単文理解における主題助詞と主格助詞の動作主性とその発達: 日本語の助詞とトカとの比較。教育心理学研究, 34 (印刷中)

付記 本論文は昭和62年度文部省科学研究費(個人奨励研究)の研究成果の一部である。